



学校だより

6月号
横浜市立桜台小学校
令和3年5月31日発行

感性を育てる

校長 小宮 健

曇り空が続くこの時期になると、「梅雨なのに何で6月のことを『水無月^{みなづき}』っていうのかな…？」と国語の授業中にある児童がつぶやいたことを思い出します。ふとした疑問から語源を調べてみることで新たな知識へとつながっていく——まさに学びが生まれた瞬間でした。子どもたちのつぶやきには本質をとらえたものが多く、ハッとさせられることがあります。

日頃、校舎を巡回すると、子どもたちの眼差しや息遣い（マスクで表情がはっきりと見えないのが残念ですが）、雰囲気や空気感から学級の状況を感じ取ることができます。掲示されている作品からは、子どもたちの感性の素晴らしさが伝わってきます。成果物をじっくり眺めているとその背景が想像され、そこから感じられたことをもとに学級担任とコミュニケーションを図ると、時としてその児童の新たな一面を知ることもあります。

今、5,6年生の廊下には春に感じたことを表した味わい深い俳句「春の一句」が掲示されていて、思わず足を止めて読み入ってしまいます。4年生の教室の前には図工で様々な技法を用いた抽象画が飾られています。いろいろな技法を試しながら制作したのでしょう。題名も作品を一層引き立てています。図工室のショーケースには3年生の粘土の作品が展示されています。自分なりのイメージで細部までこだわって作り上げたのでしょう。どの作品もとても素敵です。2階では2年生の整った文字が目にとまります。入学後1年間でこんなにも字が上手になったのだなと、何だかシーンとしてしまいます。1年生の生活科カードには、これから育てる植物の種を興味深く描写して、見つけたこと・感じたことや発芽への期待感などが思い思いに一生懸命書き表されています。低学年の作品は大きさも形もまちまちで形式にとらわれない自由さや大胆さが魅力的です。また、3階の音楽室から響いてくる澄み切った歌声にうっとり聴き入ってしまうこともあります。

自分が今、もし同じ課題に取り組んだとしたら、果たして、子どもたちと同じようにあのように純粋で豊かな表現ができるのでしょうか…。

まだ教師経験の浅い頃、学級経営案に私が書いた「感性豊かな子どもを育てる」という文言に校長が返した言葉を覚えています。「具体的にどうすれば感性豊かな子どもが育つの？」という問いに対してなんと答えたかは覚えていないのですが、校長の「あなたが豊かな感性をもっていれば、放っておいても子どもたちの感性は豊かになります」という言葉はしっかり心に残っています。

桜台小の子どもたちに負けないように、歳を重ねるごとに増してくる心の錆を振り払い、感性を蘇らせていきたいと思うこの頃です。

さて、5月中旬から、校長と6年生3～4名ずつとで30分程度のグループミーティングを始めました。給食終了後の清掃の時間帯に、まずは自己紹介から始まって、今の自分の思いや願いを聴いています。特別活動で取り組んでいる「自分づくり・パスポート」をもとに、昨年度の6年生から学び取ったことや憧れていたこと、最高学年としての思いや願い、教科担当制導入後の印象や感想、校長への質問や要望などを率直に話してくれます。

「みんなが気持ちよく挨拶を交わす学校にしたい」「廊下を走らないようにするために全校に呼びかけてみたい」「相手のことを考えて優しく人と関わっていききたい」「自分たちの背中が下級生たちにどう映っているか考えて行動したい」等々…実に頼もしい限りです。昨年度は臨時休業の影響もあって、12月～1月までの一度しか実現できませんでしたが、今年度はスタートして約1か月が過ぎたこの時期と、昨年度と同様に卒業前の2回話し合う機会を設けようと計画しています。

何といたっても学校の主役は子どもたちです。その象徴的存在である6年生がリーダーとしての自覚と向上心をもち切磋琢磨していくことで、この桜台小によりよい学校文化が生まれていきます。目標を掲げて主体的・自発的に活動し、最高学年としての役割を担い責任を果たしていくことは、将来「生きる力」となって働くでしょう。その学校風土を5年生以下が受け継ぎ、発展させていくことで「揺るぎない伝統」となっていく…そんな学校にしたいと強く思っています。